# 活動紹介

千葉県森林インストラクター会

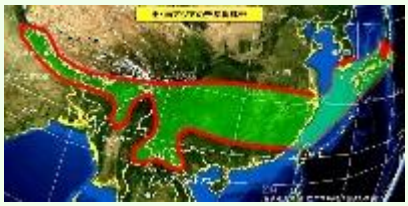
| | | | |
|---|---|---|---|
| 活動分野 | ステップアップ講座 | | |
| タイトル | 照葉樹林文化論 | | |
| 実施日時 | 2021 年２月 18 日（木）19 時 15 分～21 時 15 分 | | |
| 実施場所 | オンライン (ZOOM) | | |
| 受講者 | 37 名 | ＦＩＣ会員 | 38 名（講師含む） |

**活動の内容　照葉樹林文化論についてのオンライン懇談会**

講師の片山さんは旅行代理店に勤務されていた時期、ブータンに旅行されて、日本によく似た文化があるのを垣間見て、感動された。今回の講座では、この文化にまつわる仮説の壮大なロマンを楽しむよう説明して頂いた。

**１．照葉樹林とは**

照葉樹林とは東南アジア暖温帯の常緑広葉樹を指す。同じ暖温帯の常緑広葉樹である地中海地域の硬葉樹とは区別される。クチクラ層が発達し、葉が光るので「照葉」と言う。日本では関東以西に照葉樹林が発達している。この地域の優先樹種としては、カシ、シイ、マテバシイ、タブノキ、ツバキ、サザンンカ等がある。照葉樹は寒さへの対応が最も重要であるのに対し、硬葉樹はオリーブの木、コルクガシ等、葉が小さくて乾燥に対する適応で毛のある種類が多く、余り光っていない。



**２．照葉樹林文化論とは**

1952 年マナスル踏査隊がネパールへ。隊員中尾佐助はヒマラヤの植生が故郷とよく似た照葉樹林帯であることを発見した。1958 年秘境ブータンを調査し、植生以外でも食文化や栽培植物、風習、衣服など色々な共通点があるのを知った。それは、広い世界の中でも日本とブータンを結びつける一本の糸である。日本の生活・文化の基盤を成すいくつかの要素がヒマラヤから東方へ、特に中国雲南省を中心とするエリアに集中しており、この一帯から長江流域、台湾を経て日本内部に続く照葉樹林帯に共通の要素は共通の起源から伝播したのではないかという仮説が 1966 年に発表された。照葉樹林文化論であった。

**３．照葉樹林文化、さまざまな文化の共通性**

共通する文化としては、イネの栽培、竹細工、門松の礼の風習や茶を飲む習慣、漆を塗る椀、納豆、麹酒の製法、吊り壁と高床式の家屋、蚕の文化、歌垣の習俗、山の神の信仰、天の羽衣の伝説、昔話・神話の類似、コマまわし、綱引き、マリ投げ、なわとび、あやとりなどの遊びがある。「シソ」や「エゴマ」もほぼ分布が重なっている。日本の「納豆」はインドネシア・ジャワ島の「テンペ」、ヒマラヤの「キネマ」と似ており、中国雲南省を中心とした「ナットウの大三角形」内に伝播したと考えられる。ジャポニカライスも照葉樹林帯にピッタリ合う。日本(琵琶湖)のフナズシと似るナレズシ(中国南部、タイ、ボルネオ)もある。講師の片山さんがブータンに旅した折にも日本分化との色々な共通点を体験された。男性用民族衣装はどてらに似た「ゴ」であった。あやとりをしている子にも出会った。数の数え方も似ている。１（チー）、２（ニー）、３（スム）、４（シー）など。

**５．ナラ林文化**

照葉樹林文化に色濃く影響を受けた西日本の縄文文化に対して、東北アジアのナラ林に見られる文化要素が流入して東日本の縄文文化を形成したと言われるのが「ナラ林文化」である。東日本の落葉樹林には、オニグルミやクリ、ミズナラなどの堅果が実る樹林が多く、河川にはサケ等の遡上も見られ、採集、狩猟、漁労を中心に発達したのが東日本の縄文文化である。

本サイトの記事・画像等の無断転載は禁じます。

（作成：　鍛冶健二郎　）